

MPPC ワークショップ

岡 村 昇 一

2019年2月18日から21日までの4日間、東京大学本郷キャンパスの小柴ホールにおいて、MPPCワークショップが開催されました。MPPCの名称は、Max-Planck Princeton Center for Plasma Physicsという国際センターに由来しています。このセンターは、核融合科学と天体物理学の国際的な分野融合的研究を発展させることを目的として、2012年に、ドイツ・マックスプランク協会と米国・プリンストン大学との間に設立されたものです。一方、自然科学研究機構においても、2015年より、核融合科学研究所と国立天文台を中心とした同様の目的に向けた動きが大きく進展しており、現在それは、日米独の三極による国際共同研究としてまとまりつつあります。今回の日本におけるMPPCワークショップの開催は、多くの日本の研究者がこの国際的動きに参入する契機の一つとなりました。

このワークショップの主な目的は、核融合科学と天体物理学において共通の基礎的学問分野となっているプラズマ物理学に関して、分野融合的な観点から研究発表と議論を行うことです。今回は、磁気再結合現象、プラズマ乱流現象及び高エネルギー粒子に関するプラズマ物理現象の「融合プラズマ物理学」が中心的な話題となり、プラズマ物理が大

きな役割を果たす天体现象及びヘリカル系磁場配位の最適化等も紹介されました。

ワークショップの性格から、ドイツと米国からの参加者が海外からの参加者の多数を占めていますが、日本開催ということで豪州及び中国等からの参加もありました。日本からの参加者は、全参加者104人の約半数でした。ワークショップは、研究成果の発表よりも議論に重きが置かれ、23件の招待講演と55件の口頭発表が用意されました。主に、午前中は大会場で招待講演が行われ、午後は4カ所の分科会に分かれて発表が行われました。会場では、今後の日独間及び日米間の国際共同研究に発展すると期待される、活発な議論が展開されました。

核融合科学研究所からは4件の招待講演を含めて全部で11件の発表がありました。研究所の特任研究員のフルヴィア・プッチさんは、自然科学研究機構の戦略的国際研究交流加速事業に従事してきた2年間のまとめとして、このワークショップの二つの分科会のプログラミングを任されました。これらの分科会では、部屋に入りきれないほど多数の参加者が集まっていました。

(研究力強化戦略室 特任教授)



会議出席者の集合写真